

はばたき

H A B A T A K I

Vol. 53

「知る」ことから、
全てが始まる。

・永尾 比奈夫 新学長インタビュー (P.4)

・TENRI PIONEERS (P.6)
寄り添う支援から、まちづくりへ。
誰もが生きやすい社会をめざして。
相談支援員 井原 桃さん

— その他 特集 —

・外交官養成セミナー (P.8)
・SPECIAL CROSS TALK (P.10)
「夢分析×『源氏物語』」

色鮮やかな人生と 喜びに満ちた社会に、 いま必要なもの。

情報が溢れる、現代社会——

膨大な知識を効率良く身につけることが、
多くの場面で求められるようになっていきます。

もちろん、膨大な数の英単語を覚え、
歴史の年号を暗記することも学びのひとつです。

しかし、世界のさまざまな人と文化の壁を超えて語り合い、
過去を振り返り、いまの社会に潜む問題を見つけるためには、
単に知識を獲得するのではなく、
知識を広く・深く、自ら掘り下げる経験が欠かせません。

その過程で得られる力を、

私たちは「教養」と呼んでいます。

教養は世界の見え方を、がらりと変えます。

まるで、精度の高い顕微鏡や望遠鏡のように。

それは人生を豊かにすることはもちろん、

自分とは違う誰かに共感し、

寄り添い、支えていくために欠かせない源泉となるはずです。

天理大学では創設以来、他者に貢献できる人材の養成に励んできました。

2024年4月からは15学科への再編により、

新生・天理大学がスタートします。

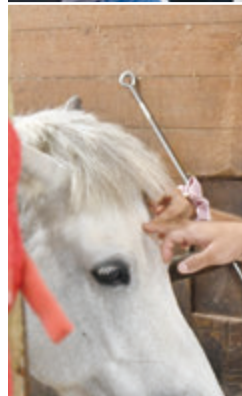
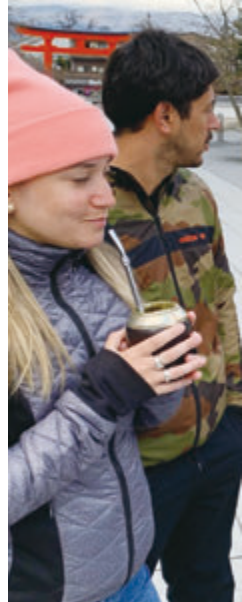
変化の激しい時代だからこそ、

いま本当に必要とされるのは、

豊かな教養を力に、ひとを想い、行動できる力です。

教養の涵養を重視するプログラムのもと、

誰もがいきいきと輝く未来を担う人とともにめざしませんか。



Knowledge to Act 他者に貢献する教養を



—— 教養がもたらす「6つの変化」

教養を深めると私たちの人生や社会はどのように変わのでしょうか。6つの視点で解説します。

分かる

なぜその状況があるのか、困っているのは誰なのか、どうしたらその課題を解決できるのかについて考えられるようになります。

認める

教養はさまざまな相手を受け入れながら多様な価値観を認める力となり、それぞれの人生を豊かに彩ります。

見える

幅広い知識を獲得し自分自身の考えを持つことで、視野が広がり、世界や日本のニュース、地域の課題に気づけるようになります。

支える

社会の課題や、誰かの困りごとに共感する心と姿勢は、周囲を支える原動力になります。

繋がる

相手に寄り添う共感力や多様性を重んじる姿勢は、人と人、社会と人とをつなぐ力として活かされます。

創造する

誰もが喜びに満ちた社会をつくるにはどうしたらよいかを考え、その実現に向けて行動できるようになります。

100周年の、
さらにその先へ。
共生社会に貢献する人を
一層輩出していくために。



2023年4月、天理大学の学長に就任しました永尾 比奈夫と申します。

天理大学は、「『陽気ぐらし』世界建設に寄与する人材の養成」を建学の精神に掲げ、100年に及ぶ歴史を重ねてきました。私なりの言葉で表現するなら「陽気ぐらし世界」とは、人々が国境も文化も超えて互いに助け合い、共生する世界です。そしてその実現に寄与できる人とは、自分よりも他者を優先できる「利他の心」を持ち、献身的な態度で周囲の人々に明るさを届け、自らも陽気な心で日々を送ることのできる人だと考えています。それを私たちは「天理スピリット」として「他者への献身」と謳い、大切にしています。

地球温暖化や環境破壊など深刻な問題が山積する今、あらゆる場所で持続可能な社会の実現に貢献できる人が求められて

います。本学が建学の精神のもとで育成してきたのは、まさに今、これからの世界で必要とされる人です。

こうした人を育てるため、教育の柱に据えているのが、「宗教性」「国際性」「貢献性」です。宗教性は、信仰を問わず、人々が楽しく喜びに満ちた生活を送れるよう願う心に立ち現れるものだと私は考えています。そうした心と姿勢で世界の人々と向き合っていくためには、異文化や多様な価値観を理解し、国境を越えてコミュニケーションを取る力といった国際性が欠かせません。「語学の天理」と言われる本学では、充実した国際教育環境を整えています。これらの宗教性、国際性を持って、困っている人に手を差し伸べる「行動力」が貢献性です。この3つを養うために重視しているのが、教養教育です。



揺るぎない理念を軸に、教養教育で人間性を育みます。

天理大学は、2025年に創立100周年を迎えます。それを前に、未来を見据えた改革に乗り出しました。建学の精神が揺らぐことはありません。変わらない理念のもと、より学生の視点に立ちながら、魅力をこれまで以上に感じてもらえる大学へと進化するべく、2023年4月には天理医療大学を統合し、新たに医療学部を開設しました。さらに2024年4月には、現在の5学部から、人文学部、国際学部、体育学部、医療学部の4学部15学科に再編することを予定しています。これまでの特徴的な学びを学部・学科として「見える化」し、学外に強くアピールしていくのがねらいです。

加えて力点を置くのが、「教養」の涵養です。全学教育推進機構の設置と総合教育科目群の再編により、学部横断的なプログラムを増やしていこうとしています。

「教養」とは、「人間力」です。寛容性や謙虚さといった心のあり

方から幅広い知識まで、あらゆる人間性は多様な教養教育によって磨かれます。昨今は、技能や資格といった実学を身につける学びが人気を博していることも事実です。しかし豊かな人間性がなければ、そうした「実学」を社会で活かすことはできません。私たちが教養教育を通じて養うのは、真に社会に役立つ力であり、それはいわば「実践的教養力」です。

その一例が、2023年度にスタートさせた「ホースセラピー」を学ぶ特別講義です。馬と触れ合う実習を盛り込み、受講すれば、「中級バイオセラピスト」(国際エクササイズサイエンス学会認定)資格を取得でき、動物取扱責任者となる道も開かれます。プログラムを通して実社会に役立つ資格を得るだけでなく、悩める人に支援の手を差し伸べられる、そんな資質も養われます。

せいひつ 静謐な環境での4年間で、 利他の心を育む絶好の機会に。

天理大学の最大の強みは、ここ奈良・天理の地にあることです。古の都が築かれた奈良には古墳群や史跡が多く点在するほか、附属施設である天理図書館・天理参考館にも貴重な蔵書や文化財が数多く収蔵されています。本物を見て、本質に触れて学ぶうえでの理想的な学びの環境が整っています。

そして何より天理教の聖地であるおぢばで学ぶことに大きな意義があります。この地が信仰を持つ人にとって特別な場所であることは言うまでもありませんが、天理教を信仰していない学生にとっても、祈りに包まれた静謐な空間で4年間を過ごすことは、利他の心や他者への献身を育む貴重な機会になるはずです。

100周年のさらに先を見据え、私は本学をこれまで以上に

「恩を感じられる大学」にしていきたいと思っています。少人数教育を徹底し、教職員が親身になって学生とかかわるのもそのためです。大学生活を通じて多くの恩恵を感じ、「天理大学で学んで良かった」という気持ちを持って、社会にはばたいてほしい。そして将来に渡り、本学に心を寄せてほしい。それが本学を志す人を呼び込むことにつながり、その先にこそ、本学の持続的な発展があると信じています。

Profile

ながお ひなお
天理大学 学長 永尾 比奈夫

1986年6月、カリフォルニア大学バークレー校卒業。1990年8月、カリフォルニア大学サンタバーバラ校大学院修士号取得。天理教海外部次長、学校法人天理教校学園理事、学校法人天理大学専務理事を経て、2023年4月より本学学長に就任。

社会をめざして。

誰もが生きやすい

まちづくりへ。

寄り添う支援から、



相談支援員 井原 桃さん

2004年3月、人間学部人間関係学科社会福祉専攻卒業。結婚・出産を経て社会福祉士資格を取得し、相談支援事業所にて勤務。老人保健施設や障がい者施設で相談員として働くほか、地域づくりの一環として職人のもと著作にも携わる。2022年4月より、大淀町役場福祉介護課にて勤務。

支えているつもりが、支えられている。 そう気づかされる瞬間が醍醐味です。

「これまでは行政で働くなんて、考えていませんでした。偶然、私が生まれ育ち、現在も暮らす町が相談員を募集していて。以前からやってみたいと思っていたまちづくりにも携われると知り、迷わず応募しました」。

そう朗らかに話す、井原 桃さん。彼女が奈良県大淀町役場の福祉介護課に就職したのは、2022年4月のことだ。現在、国が進める地域共生社会（重層的支援体制整備事業）に取り組むにあたり、大淀町が新たに相談支援の専門職を募集したのがきっかけだった。

現在井原さんは、複合化するニーズに応える支援体制づくりと並行し、相談員として地域で困りごとを抱える人への直接支援を担当する。地域の福祉事業所や社会福祉協議会等と連携しながら、高齢施設のサービスを案内したり、児童相談所や学校にサポートを依頼するなど、必要な支援が必要な人

に届くよう橋渡しする役割を担う。それは、口で言うほど簡単ではない。

「困っていることを打ち明けたり、支援を受け入れたりすることを拒絶する方もいます。だからこそ、『井原さんになら話そうかな』とっていただけるまで、時間をかけて寄り添うことを大切にしています」。

井原さんには、忘れられない人がいる。

「ご自身が病気で困窮されているうえに、お子さんを抱えて子育てにも悩んでおられる。にもかかわらず、最初は『支援なんか必要ない』と、なかなか話を聞いてもらえませんでした」。

井原さんは諦めず、何度も家を訪ね、電話をし、根気よく話に耳を傾けた。そんな姿勢にいつしか相手は心を開き、支援を受け入れる気持ちになってくれたという。

「最後にお電話をいただき、元気な声で『一生忘れません。ありがとうございました』とかけられた言葉をいまでも覚えています。大きなご褒美をもらったように感じました」。

相手とつながれる喜び。 障がい者施設での実習がこれまでを 見直す転機に。

「相談員に興味があって社会福祉専攻に入ったものの、実は遊んでばかりの学生でした」。

井原さんは、懐かしそうにそう振り返る。そんな彼女が社会福祉に目覚めたのは、2年次のこと。現場実習で訪問した重症心身障害児(者)施設で、気持ちが一変したという。

「言葉を発することも、身体を動かすことも難しい方々を目の当たりにして、大きな衝撃を受けました。ここを知らずに福祉に携わりたなんてよく言えたものだ、今までの自分が恥ずかしくなりました」。

実習中のコミュニケーションには、葛藤も覚えた。それでも挫折しなかったのは、“つながる”喜びを見出したからだ。

「顔を向けてくれた、視線が合った——小さくてもそんなレスポンスが返ってくると、すごくうれしくて。福祉関係の仕事に就くために本気で勉強し始めたのは、それからです」。

その後3年次には、市役所での現場実習も経験した。

「行政が幅広い視点で社会福祉を実施していることを知り、行政あつての福祉なのだと思身で実感できたことは、現職への応募にもつながりました」。



支援は一方通行ではない。 その気づきが、他者を支える力になる。

相談員として多くの人から頼りにされる井原さんだが、失敗を積み重ねたから今があると明かす。

「相談支援事業所で相談員を始めたばかりの頃は、人の心を開く方法もわからず、支援を断られてばかり。完璧な相談員でいなければ……と思うあまり、誰にも相談できずに心が折れてしまったこともあります。気持ちが楽になったのは、『助けて

ください』と言えるようになってからです。いまは上司や職場の仲間に相談しながら、できないことは専門の課に任せるなど、チームでの支援を心がけています」。

困りごとを抱える人のために時間を惜しまず奔走しながらも、いつも笑顔を絶やさない井原さん。活力の源泉は、「支援は決して一方通行ではない」との気づきだ。

「ご自身が大変な状況にあるにもかかわらず、私のことを気遣ってくれたり、子育てへのアドバイスをくださる方もいます。支援しているつもりだけど、実は私が支えられていると気づかされることも少なくありません。そんな風に誰もが支え合って生きていることを知れば、社会もきっと変わっていくはず」。

その想いを胸に、井原さんは重層的支援体制づくりにも力を注いでいる。いま最も課題に感じているのは、社会資源の少なさだ。

「困りごとを聞き出せても、肝心の支援やサービスがなく手詰まりになることがあります。これからは直接支援だけでなく、多様な支援制度を充実させることも目標です」。

井原さんの描く夢は、広がる。

「この先も、ずっとこの町に住み続けたい——そんな風に思えるまちづくりに今後も携わりたいです。他の市町村にもそう思う人を増やしなが、誰もが生きやすい社会に貢献できればと思っています」。

外務省専門職員採用試験に、 受講生が合格。 ひとを想い、行動できる 外交官をめざして。



外交官養成セミナーは、語学教育における本学の伝統を活かしたプロジェクトです。語学や国際情勢に関する学習、現役外交官との交流などを通じ、外交官として国際社会に貢献する人材の育成をめざします。

本プロジェクトがスタートしたのは、2018年秋。開始から5年を迎えた今年、セミナー受講生の鴻野 直人さんが、2023年度外務省専門職員採用試験に合格しました。外交の世界へとはばたく鴻野さんに、セミナーの魅力や今後の抱負について聞きました。

漠然とした憧れが セミナー参加で目標が変わるまで。

「国際舞台で働く夢が、外交官になるという具体的な目標に変わっていくのを感じました」。

真剣な眼差しでそう話す、鴻野 直人さん。高校時代から英語を使う職業に興味を持ち、留学制度の整う天理大学に入学した鴻野さんは、1年次に英語科目の担当教員を通じて「外交官養成セミナー」の存在を知った。

「ちょうどセミナーが新たに始動した時でした。実は外交官という仕事について、当時はよく知らなかったんです。大学生になったからにはしっかり勉強しよう、との想いで受講を決めたのですが、いざセミナーが開始すると、現役外交官との交流など、貴重な機会が豊富にあって驚きました。特に印象に残っているのは、現・在セブ総領事を務める山地 秀樹さんのお話です。外交の frontline に立つ方のリアルな言葉に刺激を受けました。外交って、政治って面白いんだなと気づかされたことをきっかけに、本格的に外交官をめざすようになりました」。

外交官養成セミナーの受講生は、セミナー科目を週に5コマほど受講する。通常の履修科目との兼ね合いで、セミナー科目は授業時間が始まる前の朝や、放課後に開講されることも多い。学部学科等の授業と両立しながら、仲間と切磋琢磨で勉強に熱中した日々を、鴻野さんはこう振り返る。

「外務省専門職員試験では、一次試験の論述、二次試験の面接において、語学力はもちろん、国際法や憲法などの知識や国際情勢への理解が求められます。大学4年間は、苦勞した

思い出がほとんど。でも、試験に合格できたのは、やはり1年次の頃からセミナーでしっかり学んだおかげだと思っています」。

衝撃を受けた911メモリアル。 留学中の体験が、情熱に火を着けた。

外交官になるための勉強、というと座学のイメージも強い。だが、外交官養成セミナーの各科目は、受け身で聞く授業とは一線を画す内容だと言う。

「セミナー科目の軸にあるのは、ディスカッションです。講義を聴くだけでなく、自分から質問をし、教員や受講生と議論を交わすことがどの授業でも必須です。セミナーの担当である小松崎 利明 准教授は、『自分で質問を作ること、練り出すことが大切』と常におっしゃっていました。良い質問かどうかは別だとしても、まず自ら疑問を持ち、“問いを作る”ことが第一歩なのだ。こうした訓練を重ねることで、多角的な視点で物事を捉え、自分の言葉で考える力が身についたと思います」。

外務省専門職員として、配属先はこれから決まるという鴻野さん。現時点では、テロ対策にかかわる業務を希望しているとのこと。その想いの原点は、留学先のアメリカ合衆国での出来事だ。

「3年次にオハイオ州立大学へ交換留学した際、ニューヨークの911メモリアルに行く機会があったんです。かつて世界貿易センタービルがあった場所に慰霊碑が建てられているのですが、そのなかに日本人の名前も見つけました。奪われた



[外務省専門職員に内定]
国際学部 外国語学科 英米語専攻
2023年3月卒業
鴻野 直人 さん
(天理高校卒)

命に衝撃を受けるとともに、海外で初めて日本人としてのアイデンティティを突きつけられたその瞬間を、今でも鮮明に覚えています。外交官としてこの分野に携わりたいと感じ、留学中には政治学の授業のほかにテロリズムに関する授業も積極的に履修しました。

“この人となら一緒に仕事ができる” 人間力で信頼の醸成に貢献したい。

鴻野さんは現在、アラビア語の習得に励みながら、職務のスタートに備えている。外交官に必要な資質とは、一体どんなものだと思いますか？——そう尋ねると、鴻野さんは迷いなく答えてくれた。

「“信頼”を醸成する能力だと思います。外交官には、政府間の信頼を得ることが求められます。『この人となら一緒に仕事をすることができる』と思ってもらうこと——それは言い換えれば、“結局は人間力”という言葉に尽きるかもしれません。一つ一つに対して誠実に応えることが、個人間でも国家間のレベルでも、信頼関係の構築につながると考えています」。

後輩へのメッセージと今後への意気込みについて、鴻野さんはこう語る。

「外交官は、日本や世界の平和に貢献したいとの想いを形にできる職業です。私自身、「ナオトが言うなら間違いないね」——そんな風に言ってもらえるような存在に成長したいです。在学生の皆さんも少しでも国際情勢に関心のある人は、ぜひ外交官養成セミナーへの参加を検討してみてください。

今後は外務省専門職試験に合格したセミナー受講生の第1号として、後輩をサポートしていければと思っています。

EYES セミナー担当教員の「視点」から

国際学部 外国語学科 英米語専攻 小松崎 利明 准教授

難関試験の先で、 世界があなたを待っています。

外交官養成セミナーでは、大学の通常科目より負荷の大きい授業を実施しています。教員とほぼマンツーマンの語学科目など、少人数制を活かした指導が魅力です。外務省専門職試験の突破は簡単ではなく、大変な労力と時間を要します。しかし試験のハードルを越えれば、その先で必ず誰かがあなたを必要としています。受講生には能動的に学んで考える訓練を積むことで、外交官になっても、あるいは最終的にほかの道を歩むことになったとしても、周りの役に立つ人間として成長して欲しいと願っています。この度、外務省専門職員に内定した鴻野さんの持ち味は、なんとと言っても努力した分だけ確実に伸びる資質。天理大学で培ったエートを、ぜひ日本外交のなかで活かして頑張ってください。

眠る源氏は何を想う？ 夢分析 × 『源氏物語』が、 私たちに教えてくれること。

各学部でそれぞれの分野を専門的に学ぶなかで、ヒントになるのは予想外の気づきや視点です。

加えて専攻外の知識や経験が刺激となり、あなたの学びをさらに深めてくれます。

2024年4月の改組以降は、学部・学科を超えたプラス・ワンの学びが実現します。

本記事では、「夢」×『源氏物語』をテーマとする教員の対談を通じ、

分野をクロスする学びの一例をご紹介します。

『源氏物語』にある夢の場面。光源氏はどんな夢を見ていた？

原：天理大学での臨床心理の取り組みは、人間関係学科臨床心理専攻が発足した1992年よりずいぶん古いそうですね。

橋本：臨床心理専攻ができたきっかけは、河合 隼雄 先生 の存在です。河合先生は天理大学に籍を置きながらユング研究所で心理療法を学び、日本に箱庭療法を紹介しました。日本で最初に箱庭療法を始めたのが天理大学だったのです。

橋本：今日は夢と平安文学のお話ができればと思います。ジークムント・フロイトは、精神分析学の創始者とも言われる心理学者・精神科医です。このフロイト以来、夢分析は精神分析や心理治療に用いられてきました。今でもユング派(分析心理学)の分析の中心は夢分析です。『源氏物語』にも夢の記述があるそうですね。

原：『源氏物語』には夢の場面が二十ほどあります。主人公の光源氏が見る夢が多く、主に男女関係にかかわる夢と、源氏の出世にかかわる夢が連動して描かれているようです。

例えば「明石巻」に出てくる夢の話があります。源氏が須磨に行ったときに死んだ桐壺帝(光源氏の父)が夢に出てきて、「なぜこんな所にいるのか？住吉の神の導きによって、この浦を離れなさい」と言うんです。光源氏は父に向かって、「今は大変辛く悲しい、この渚に身を捨てたいのです」と伝えます。父は「自分自身も在位中に罪があり、その罪が終わるまでは忙しかったが、悲しんでいるお前のためにここにやって来た。これから内裏に奏上に行く」と言って立ち去ります。

原 豊二 教授

物語を動かす「愛と罪」。父が夢に出るのには訳がある。

橋本：「自分自身も在位中に罪があった」とか、「その罪が終わるまでは忙しかった」との言葉がありますが、その父の罪とは何を指すのでしょうか。

原：実は、それが本文には具体的に書かれていないんです。研究者の間でも議論がありますが、「王権」にかかわる思想が背景にあると考えられます。



今秋、天理図書館所蔵源氏物語資料から 珠玉の三十三点を一挙公開

『源氏物語』資料群から主要な物語写本・絵画資料・自筆注釈書類を天理参考館で展示いたします。ぜひご来場ください。

天理図書館開館93周年記念展 源氏物語展 一珠玉の三十三選一

会期：2023年10月18日(水)～11月27日(月)[休館日：毎週火曜日]

時間：9時30分～16時30分 会場：天理大学附属天理参考館

入館料：大人500円、小中高300円



橋本：『源氏物語』は、そもそも桐壺帝(光源氏の父)の罪から始まる物語ではないかと私は思っています。桐壺帝は賤しい身分の桐壺更衣(光源氏の母)を愛し、政治の世界では許されない私情を優先しました。当時としては大変なことで、実際に桐壺帝は私人としての愛と公人としての生き方で葛藤しますし、一方で桐壺更衣は酷いいじめに遭い亡くなります。そのこともあって、桐壺帝は息子の源氏に十分な地位を与えませんでした。『源氏物語』を動かしているのは、こうした愛と罪ですよ。

原：フロイトが提唱した「エディプスコンプレックス」の観点で考えると母親が登場してほしいようにも思えますが、この夢に出てくるのは父親です。この夢を見た光源氏の精神状態も気になります。

橋本：父が登場するには、納得がいきます。父が源氏を再度政治の世界へと駆り立てるのです。源氏のなかで全てを捨て死にたい気持ちにまで至ったところから、それを反転させる力として、父なるものが源氏を立ち上がらせたのではないかと思います。人が大きく変化したり、事態が大きく変わったりすることの背景に、この夢にあるような心の動きがあるのが面白いですね。父が現れたというのは、今後の源氏の人生のなかで、今までなかった「父なるもの」が課題になっていくことを意味するのかもしれない。

物語は「心を収める器」。物語研究×臨床で見えること。

原：興味深いお話ですね。『源氏物語』研究においても、先生のおっしゃっていることは指摘されています。物語研究を臨床にひきつけてみると、物語自体にもカウンセリング効果があるように思います。例えば「帚木巻」に「雨夜の品定め」というのがあって、男たちがそれぞれ自身の経験を話すところがあります。多くは女性にかかわる話です。この場面は、『源氏物語』の「物語内物語」と言える箇所なのですが、話す側・聞く側がともにそれを楽しんでいるようでもあるんです。

橋本：物語それ自体にカウンセリング効果があるというのはその通りです。思春期の人たちは、面接でよく漫画やアニメや

映画の話をする。自分の心にぴったりくるアニメの話は、そのまま彼らの心の様子であり、それらの物語は心を収める器になります。自分の気持ちをうまく表現できない彼らの心の世界を、私たちは彼らが語る物語から理解することができるのです。

『源氏物語』には、1対1の愛を求める気持ちとそれに伴う嫉妬の感情が見られますね。表面のメロディーはさまざまでも、その底に流れ続けるひとつの低い音のように常に嫉妬が見え隠れします。物の怪が多く現れるのもそのような押し殺された感情と関連があるように思います。嫉妬は恋をめぐって万人が持つ感情でもあり、だからこそ時代を超えて読み継がれるのかもしれない。



橋本 尚子 教授

— 研究室 探訪 —

ロシア・ウクライナの魅力を探究。 時代や民族を超えて 世界を多面的に見つめる。

国際学部地域文化学科ヨーロッパ・アフリカ研究コース
准教授 日野 貴夫

ロシア語やウクライナ語、あるいはその両国を含むスラヴ諸国の文化について研究を行っています。私の研究の原点は小学3年生の時に万国博覧会で何時間も並んで入ったソ連館の思い出、そして幼い頃から好きだったチャイコフスキーの音楽。ロシアという広大な国に憧れを抱き、ロシア語の勉強を始めました。その後、ウクライナ生まれのロシア語作家ニコライ・ゴーゴリの作品と出会い、ウクライナ文学の研究や翻訳にも取り組んできました。

ロシアという国は色々な意味で大きな国でありながら、時にはネガティブな印象を持たれることもあります。しかし、それはステレオタイプのイメージで語っている場合がほとんど。

それぞれの立場や状況によって物事の見方は変わります。自分に都合の良い見方、考え方をすることなく、物事を多面的に捉えることこそ大切だと感じています。



天理大学とウクライナのキーウ大学が協定校となり今年で20年。本学開催の夏期日本語講座の参加者を含めると、これまでに200名以上のキーウ大学の学生が本学で学んでいます。天理大学での学びを経て、現在、日本で活躍しているキーウ大学出身者は10名以上になります。また、昨年のロシアによる軍事侵攻の際には、日本への避難を希望するキーウ大学の学生9名の生活面と学修面の援助を行い、チューター制度によって学生間の交流も深まりました。

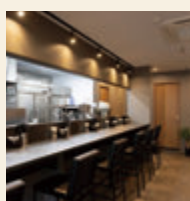
この地球には80億もの人々が暮らしています。一人ひとりにアイデンティティーがあり、それをお互い尊重しながら共存していかなければなりません。とても難しいことですが、自分のアイデンティティーを失うことなく、みんな陽気で仲良く暮らせる世界の実現に向けて模索できる環境に身を置いてほしいです。その糸口を掴むべく、様々な発見が天理大学にはあると思います。

天理市周辺の名店とその逸品を紹介

THE 天理 ゴハン

シンプルを極めた こだわりの一杯を堪能。

関東の有名ラーメン店で修行を積んだ店主が天理駅前にオープンした「らぁ麺 せんいち」。清潔感のある店内は女性から食べ盛りの学生まで多くのお客さんと賑わいます。メニューは塩と醤油の大きく2種類。一番人気の「特製醤油らぁ麺」は豚3種類、鶏1種類の計4種類のチャーシューととろとろの味玉が絶品です。味玉をはじめ、鶏ガラや醤油、米は地元奈良の食材を使用。スタミナ系ラーメンが多い奈良では珍しく、シンプルであっさりした味わいを追求しています。



らぁ麺 せんいち

[特製 醤油らぁ麺]: ¥1,200-(税込)

[醤油らぁ麺]: ¥870-(税込)

〒632-0016 奈良県天理市川原城町801
近鉄天理線/天理駅 徒歩1分

OPEN: 月~金 11:00~15:00、

18:00~20:00 土日祝 11:00~15:00